

# TEA と質的探究学会

## 第 3 回大会抄録集

日時：2024 年 5 月 25 日（土）-26 日（日）

場所：5 月 25 日（土）（オンライン）

5 月 26 日（日）（対面）

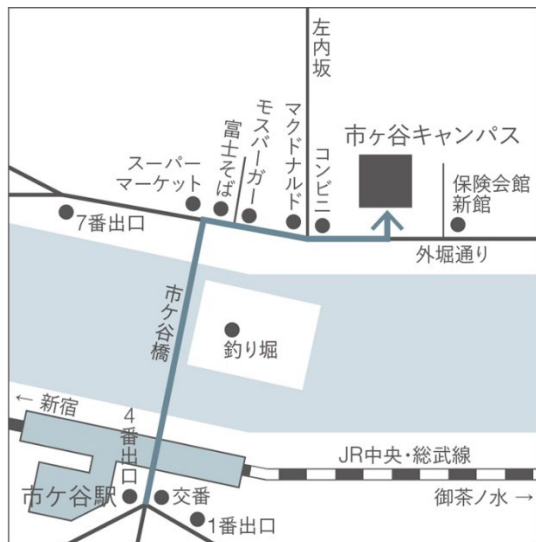
対面会場：武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス

### 目次・プログラム

対面会場へのアクセス.....	2
オンライン会場へのアクセス.....	3
発表者の方へ.....	4
抄録集.....	5
1 日目 オンライン	
10：00-11：30 オンライン大会講演.....	5
12：00-12：40 オンライン総会	
13：00-15：00 オンライン講習会/シンポジウム(計 3 件).....	6
15：15-17：00 オンラインコメントセッション（計 6 件）.....	9
2 日目 対面	
10：00-12：00 対面シンポジウム(計 2 件).....	13
12：00-13：00 昼休み	
（12：10-12：50 ランチョンワークショップ）.....	14
13：00-15：00 対面ポスター発表(計 20 件).....	15
15：15-17：15 対面講習会/ワークショップ(計 4 件).....	25

## 対面会場へのアクセス

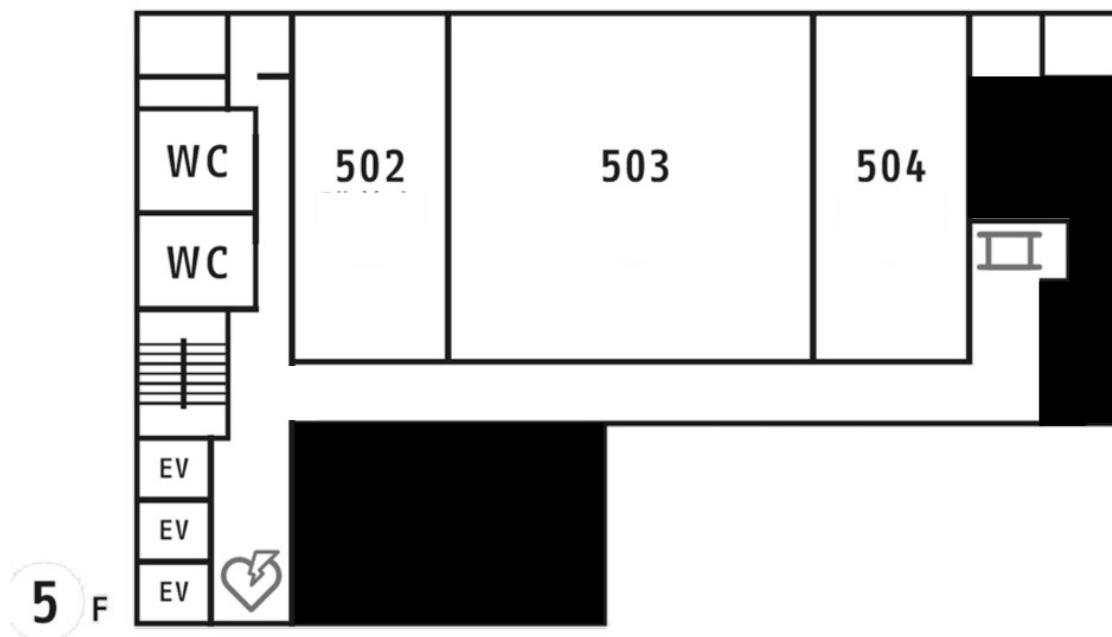
**アクセスマップ**：武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパスへは、市ヶ谷駅(東京メトロ有楽町線・南北線「市ヶ谷」駅、都営新宿線「市ヶ谷」駅 4番出口)下車 徒歩3分などです。



**会場マップ**(大会1日目は会場に入ることはできません)

受付はキャンパス入口1階、会場は主に5階です。

502は26日10時から15時まで休憩室としてご利用いただけます。



## オンライン会場へのアクセス

大会 1 日目は、Zoom 上で開催予定です。参加するための URL は、大会ウェブサイトの支払い完了者用のページに掲載します。

大会ウェブサイトの支払い完了者用のページに入るには、ID とパスワードが必要です。これらの ID とパスワードは、大会 3 日前、前日に、Peatix に登録されているメールアドレス宛に Peatix システムからお送りします。

Zoom にログインした際、Zoom 上に表示される名前と所属は、大会参加時に登録したものにしてください。

オンラインコメントセッション、講習会、オンラインシンポジウムは、Zoom のブレイクアウトルームで開催されます。参加者は自由にルーム間を移動できるように設定されていますので、自由にルームを移動して、質疑に参加してください。

## **発表者の方へ**

### **対面ポスターセッションで発表の方へ**

ポスター会場の壁面に掲出いただきます。最大サイズは A0（841 × 1189mm）です。設置用の養生テープ等は大会の方でご用意します。責任在籍時間は特に指定しませんが、発表時間中はできるだけ自身のポスターが見える位置にしておくようにしてください。

### **オンラインセッションで発表の方へ、**

いずれのセッションも開始の 10 分前には参加できるようにしますので、発表者は、画面共有やカメラ、音声等を事前に確認するようにしてください。

オンラインコメントセッションは、Zoom のブレイクアウトセッションで行います。自分の発表が属するグループ番号のルームで待機し、参加者に対して説明と質疑を行ってください。発表時間は約 20 分を目処にしてください。

**抄録集：オンライン大会講演**（5月25日10:00-11:30）

## **"Semiotic Cultural Psychology of Liminal Experiences"**

### **「移境態の記号論的文化心理学」**

講演者：Zachery Beckstead(ブリガムヤング大学ハワイ校)

司会/解説：サトウタツヤ（立命館大学）

Liminality is a core concept in semiotic developmental cultural psychology (Valsiner, 2014). Along with related concepts such as ruptures (Zittoun), transitions, and trajectories along the life course (Sato et al., 2014), liminality draws our attention to the open-ended, processual nature of psychological phenomena. This presentation aims to elucidate the theoretical and empirical potential of liminality by drawing on the ideas of Arnold van Gennep (1908), Victor Turner (1979) and Paul Stenner (2017, 2021) and bringing their ideas into contact with semiotic developmental psychology. Critically, liminality provides a lens through which we can explore the processes enabling socio-psychological transformations and the emergence of new trajectories and can also be fruitfully linked with the concept of catalysis (Cabell & Valsiner, 2014; Beckstead, 2021). This presentation will explore the theoretical possibilities of liminality in relation to the wide-spread religious and cultural practice of pilgrimage (Turner & Turner, 1979; Beckstead, 2021). This presentation aims to demonstrate how TEA and liminality when in dialogue can lead to new theoretical insights for semiotic cultural psychology.



移境態（Liminality）は時間・空間における何かと何かの間の境にある（いる）という状態を指し、記号論的発達文化心理学の中核概念である(Valsiner, 2014)。ラプチャー(Zittoun)、移行、人生径路（Sato et al., 2014）といった関連概念とともに、移境態は心理現象のオープンエンドでプロセス的な性質に注意を向けさせる。本発表では、Gennep（1908）、Turner（1979）、Stenner（2017、2021）の考えに依拠しつつ、彼らの考えを記号論的発達心理学と接触させることで、移境態の理論的・経験的可能性を解明することを目指す。重要なのは、移境態が社会心理学的な変容（Transformation）と新たな人生径路の出現を可能にするプロセスを探求するためのレンズを提供し、触媒作用の概念とも有益に結びつけることができるということである（Cabell & Valsiner, 2014; Beckstead, 2021）。本講演では、巡礼（Turner & Turner, 1979; Beckstead, 2021）という広く普及している宗教的・文化的実践に関連して、移境態の理論的可能性を探る。さらに、TEAと移境態が対話することが、記号論的文化心理学にとって新たな理論的洞察を生むことを示していく。

## 抄録集：オンライン講習会（5月25日13:00-15:00）

### TEAのいろは—TEMの基礎を学ぼう—

講師：安田裕子（立命館大学）

複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach：TEA）は、過程と発生をとらえる質的研究の方法論である。TEAは、文化心理学に依拠し、文化的存在である人の発達や人生径路を描出する方法「複線径路等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling：TEM）」が、その原点にある。TEMは等至性（Equifinality）の概念を発達の・文化的事象に関する心理学研究に組み込もうと考えたヤーン・ヴァルシナー（2001）の創案にもとづく。等至性の概念では、人間は開放システムととらえられ、歴史的・文化的・社会的な影響を受け多様な軌跡を辿りながらも、ある定常状態に等しく（Equi）到達する（final）存在（安田，2005）とされる。TEMでは、研究目的に照らして等至性を具現化する選択や行動を等至点として焦点化し、等至点に至りそこから持続する人間発達や人生径路の多様性・複線性、潜在性・可能性を、非可逆的時間と文化的・社会的な諸力とともにとらえる。本講座では初学者向けのものである。ペアワークを通じて体験的に学ぶ。

#### 引用文献

Valsiner, J.(2001). Comparative study of human cultural development, Madrid: Fundacion Infancia y Aprendizaje.

安田裕子. (2005). 不妊という経験を通じた自己の問い直し過程—治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から. 質的心理学研究, 4, 201-226

**抄録集：オンライン大会実行委員会シホ°ジウム**（5月25日13:00-15:00）

## **TEM×キャリア×イマジネーション**

企画者：市川章子（国立国語研究所）  
宮下太陽（株式会社日本総合研究所未来社会価値研究所）  
話題提供者：市川章子（国立国語研究所）  
宮下太陽（株式会社日本総合研究所未来社会価値研究所）  
新田 莉生（慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科）  
芝健司（神奈川県立磯子工業高等学校地歴公民科教諭）  
烏日哲（国立国語研究所）  
指定討論者：小澤伊久美（国際基督教大学）

イマジネーションとは過去の経験をもとに新たな考え方やイメージをつくるプロセスを意味する（木戸,2023）。人生が違った展開になりそうだと想像した場合、時に人々はラプチャー（rupture: 破裂）をつくり出す。ラプチャーはイマジネーションを呼び起こし、ラプチャーのあとには、能動的な探求を行うことが必要となり、人々は新たな状況でどう生きるか、過去から何を学ぶかを考えるのである（Zittoun & Saint-Laurent2014; Zittoun 2017）。本発表では、越境者のクローバー分析（市川章子）、人的資本管理とキャリア（宮下太陽）、自分なりの創造的な生き方を見つけ、自分らしい「ワクワクする人生」に至るまでのプロセス（新田莉生）、高校教員の生徒に対する歴史学習における動機づけ・学習意欲向上に向けたアプローチ（芝健司）、モンゴル人親の継承語教育に対する意識変化とジレンマ（烏日哲・市川章子）を題材に TEM におけるキャリアとイマジネーションについて考えるものである。

**抄録集：オンライン会員シンポジウム**（5月25日13:00-15:00）

## **TEM を用いた研究の実施方法および TEM 図作成方法の検討 ——TEM 図作成支援ソフトの開発を目指して**

企画者：中田友貴(立命館大学 R-GIRO)

小山多三代(立命館大学大学院人間科学研究科)

小田友理恵(法政大学現代福祉学部)

話題提供者：中田友貴(立命館大学 R-GIRO)

小山多三代(立命館大学大学院人間科学研究科)

小田友理恵(法政大学現代福祉学部)

指定討論：土元哲平(中京大学心理学部)

本シンポジウムでは、TEA の構成要素の 1 つである TEM の描き方を中心に、TEM を用いた研究の分析方法や記述方法について検討・考察を行う。近年、TEM は幅広い研究分野で活用が進んでいるが、TEM 図を作成していくプロセスを詳細に説明した研究論文は少ない。これまでに、TEM を用いた研究では、多様な分析・作図方法が考案されており、質的研究法の中でもその自由度の高さが特色の 1 つといえる。筆者らは、研究者が TEM 図を作成する際に直面した困難や課題等を中心に、質問紙調査とインタビュー調査を実施した。本シンポジウムでは、これらの調査結果を報告し、研究者が TEM を用いて研究を進める際に意識している点や、その研究者間の差異について話題提供者の経験とともに共有する。さらに、TEM 図作成支援ソフトのニーズや、その開発段階で生じた問題点や疑問を共有し、TEM の研究方法や記述方法、初学者への支援方法について参加者と議論を行いたい。



## 抄録集：オンラインコメントセッション（5月25日15：15-17：00）

### Group1 コメンテーター サトウタツヤ

#### **OCS1 これからの高等学校に求められるコーディネーターが「自身の役割や業務を規定していく」過程——語りに基づく TLMG の生成**

中山隆（宮崎大学共創人材育成部門）

高等学校に新しい学びの実現のためにコーディネーターが配置されている。しかし、育成方法がまだまだ十分に検討されていない。また、各所で活動しているコーディネーターたちがどのように自身の成長過程を認識しているかも十分に明らかにされていない。本研究では、コーディネーターの役割や業務に関する意識の変容過程を明らかにするため、3名のコーディネーターの語りのうち成長過程における転換点に着目し、TLMGを用いて分析した。分析の結果、コーディネーター自身が感じる業務や役割上の葛藤、自身やプロジェクトの価値の再定義していくことをきっかけに、他者との関わりから自身の役割や業務を整理したり、自分形の答えを見つけていく必要があることに気づき、それにより「自分自身で役割や業務内容を定義し続ける職業である」という価値観を形成し、自ら描いた像に沿った役割や業務をコーディネーター自身が創造していることが確認できた。

#### **OCS2 TEM 分析によって見出された径路の類型化と類型化から見出された新たな問い——日本人グローバル人材のキャリア形成を類型化した統合 TEM 図と個々の語りから**

五十嵐篤（慶応大学大学院政策・メディア研究科）

外国人と共に働きながらキャリア形成することは、グローバル化する社会でますます重要になる。本研究では、国内外で外国人と仕事し、キャリア形成をしてきた研究協力者の日本人9名にトランスビューを実施し、個別 TEM を作成後、統合 TEM 図を作成し、分析・考察することを目的とした。その結果、「異言語異文化の人と働きキャリア形成をする」という共通した等至点に辿り着くまでの径路に、Intention（意図）型・Happenstance（偶発）型・中間型の類型があることが見いだされた。TEM 分析から、ある段階までは型別で径路が大きく異なるが、ある段階から径路が共通化していくスタイルの型別統合 TEM 図が、グローバル人材のキャリア形成モデルとして成り立つのではないかという仮説が生まれた。型別の径路が共通化し始める点、つまり、等至性を有するのは、なぜ共通化しはじめるのか、何が顕著に作用する要素なのかを、型別での事例を増やししながら、更に研究・検討が必要である。

### **OCS3 物語の逆行的構成と社会的諸作用の意味転倒**

横山草介(東京都市大学人間科学部)

TEM においては、等至点 (EFP) に向かって作用する社会的な影響を「社会的助勢 (Social Guidance)」として、可能性として存在し得る別の等至点 (P-EFP) に向かって作用する社会的な影響を「社会的方向づけ (Social Direction)」として定式化し、モデルに描きこむ。だが、「いま」「ここ」において意味づけられる特定の等至点を基点として、過去想起的に物語が再構成される際に位置づけられる「社会的助勢」や「社会的方向づけ」は「いま」「ここ」を基点としたその時、その場の意味づけであって、当の語り手が「かつて」「あそこ」で経験した社会的な諸影響の内実とは異なっている可能性を内包している。この変容可能性は、語りによる体験の再構成が成されるたびに生じうる。「社会的助勢」と「社会的方向づけ」のモデル化に際しては、この問題をどう乗り越えるか、という理論的課題が残されているように思われる。

---

### **Group2 コメンテーター 安田裕子**

#### **OCS4 特別養子縁組をした養親が子育てしやすい環境を整える過程 —複線径路等至性モデリングによる一事例の分析—**

中橋奈智(石川県立看護大学大学院)・曾山小織(石川県立看護大学看護学部)  
・河野向日葵(神戸市民病院機構神戸市立医療センター中央市民病院)

本研究の目的は、特別養子縁組をした養母が子育てしやすい環境を整える過程を明らかにすることである。対象となる養母 1 名にインタビュー調査を行い、複線径路等至性モデリングで分析した。養母は地域の人に子どもを見守ってもらえる環境で子育てしたいと思い、養子を迎えたことを縁組前から仲が良い近所のママ友と近所の一部の人に打ち明けた。保健センターの顔見知りの職員に対しても縁組を打ち明けて、子育て支援を利用していた。養母は子育てがしやすいように環境を整える過程で「味方」だと思える存在ができ、孤立を感じていなかった。縁組成立後は、保育園または幼稚園に縁組したことを秘密にしていた。子育てしているうちに産み育てている親と同じだという感覚になっていた。養親が子育てしやすい環境を整えられるように、子育て支援に関わる人は養親希望者が養子を迎える頃までには顔の見える関係性をつくり、子育て関連の情報提供を行う必要がある。

## **OCS5 特別養子縁組をした養親が夫婦で協同して子への真実告知を行う過程——複線経路等至性モデルによる一事例の分析**

河野向日葵(神戸市民病院機構神戸市立医療センター中央市民病院)  
・曾山小織(石川県立看護大学看護学部)・中橋奈智(石川県立看護大学大学院)

本研究の目的は、特別養子縁組をした養親が夫婦で協同して子への真実告知を行う過程を明らかにすることである。養母1名にインタビューを行い、複線経路等至性モデルで分析した。縁組成立前に児童相談所で真実告知の講義があり、夫に仕事を休んでもらって夫婦で参加した。夫も他の人の考え方を知ったことで、夫婦で話し合うときの選択肢が広がった。しかし、男性の参加者は夫だけであった。夫婦で受講したことによって真実告知を養子にいつからどのように始めるのかという考え方が一致していたことがわかり、縁組を親戚や近所のどの範囲の人に打ち明けるのか話し合うことができた。しかし、近所の人から養子に出自の情報が漏れいするのではないかという不安とジレンマを感じていたため、夫婦で相談することが多様であり、受講したことが話し合いに役立っていた。男性が参加しやすい講義開催日時の工夫や縁組前の男性の子育て参加意識に課題がある。

## **OCS6 結婚を機に来日した滞日外国人ムスリム女性の妊娠・出産・育児期の異文化適応過程**

工藤昭子(国際武道大学別科)

グローバル化に伴い、多様な人々が日本社会で生活している。その中で、結婚を機に来日した外国人女性には日本で妊娠、出産、育児を経験する人も多い。彼女たちの知見は限られている。滞日外国人ムスリム女性の経験談を半構造化面接により得た。彼女たちを支援したことのあるムスリムのリーダー的存在の方にも半構造化面接を行った。滞日ムスリム女性の妊娠・出産・子育て期の経験を元にした越境を複合的に TEM 図、TLMG 図により分析する。結論として、モスクの女性祈祷所あるいはムスリム女性宅での居場所がソーシャルネットワークとなり、情動的サポート、情動的サポート、相互扶助により適応ストラテジーを作っていることがわかった。

**抄録集：対面大会実行委員会シンポジウム**（5月26日10：00-12：00）

（会場：503）

## **TEA の近年の理論的展開と今後の可能性**

司会者： 大川聡子（関西医科大学）

話題提供者：土元哲平（中京大学） オートエスノグラフィ+TEA

香曾我部琢（宮城教育大学） 山脈的自己

中田友貴（立命館大学） 徹底的行動主義に基づく分岐点分析

指定討論者：サトウツツヤ（立命館大学）

三代純平（武蔵野美術大学）

複線径路等至性アプローチでは、各研究者独自の工夫が求められる。そのため、さまざまな理論が次から次へと提案されている。変化を続ける TEA の多様な理論を整理し、各研究者がそれらを利用しやすく、また全体を見渡す中で、独自の新しい理論を提案しやすくする、というのが、本企画の目的である。そのために、3 名の話題提供者が、自身が TEA に加えた新しい理論を紹介してもらい、それらを指定討論者が整理し、それに基づいて未来への地図を示すことを目指す。

**抄録集：対面会員企画シンポジウム**（5月26日10:00-12:00）

（会場：504）

## **TEA と関係学をどのように接在させるのか？**

企画者・司会：乾明紀(京都橘大学経済学部)

話題提供：乾明紀(京都橘大学経済学部)

廣瀬太介(立命館大学人間科学研究科)

鬼頭弥生(名古屋短期大学保育科/立命館大学人間科学研究科)

杉本菜月(立命館大学人間科学研究科)

指定討論：宮下太陽(株式会社日本総合研究所未来社会価値研究所)

TEA（複線径路等至性アプローチ）は、オープンシステムにおける個体の変容を時間的変化と文化社会的文脈との関係の中で捉える方法論であるが、近年、TEA を一層発展させるための理論として「関係学」（松村，1972）への関心が高まっている。その理由は、これまで TEA あるいは TEM（複線径路等至性モデル）において捉えることのできなかつた、個体と個体の「かかわり」、個体と外界との「かかわり」のあり様が、関係学との接在によって表現できるのではないかという期待である。なお、接在とは「相互に関わることで独自性がいかされて変化する関係の仕方」（松村，1982）である。本企画は、既に TEA と関係学の接在を試みた4名が自身の研究内容を紹介し、TEA に関係学を取り入れる利点、見えてきた可能性、そして、課題について議論し、TEA 理論の豊潤化を目指す。

**抄録集：対面大会実行委員会企画ワークショップ**（5月26日12：10-12：50）  
（会場：503）

## **ランチョンワークショップ**

企画：大会実行委員会

本大会では、懇親会を設けていませんが、それに代わって、会員間の交流の場としてランチョンワークショップを企画しました。短時間ですが、ぜひご参加ください。

※参加者優先で、軽食（お一人サンドイッチ一つ）を提供します。

## 抄録集：対面ポスター発表(5月26日13:00-15:00)

(会場：503)

### 対 P01 生態学的な帰属と時間的展望からみた矯正施設経験者の地域コミュニティへの統合過程

廣井いずみ(愛知みずほ大学人間科学部)

矯正施設を経験した元少年が地域コミュニティに帰属する過程について、生態学的視点と時間的展望の視点から検討する。本研究では環境を入れ子構造として捉え、直接的な行動場面のみならず、それを取り巻く環境をも視野に入れた Bronfenbrenner (1994) の視点に立つ。地域コミュニティと反社会集団を異なるシステムであると捉え、矯正施設を経験した人の多くが双方に中途半端な帰属をしていると考え、帰属を定める過程が重要になると考えた。矯正施設経験者 A さんと、環境の中で重要な役割を担う支援者へのインタビュー調査、TEA による分析により、A さんの帰属を定める過程を検討したところ、①支援者との親密な関係性の構築の時期、②違法行為により地域コミュニティへの帰属が危機にさらされる時期、③地域コミュニティとの関係性を意識に上らせ、時間的展望を獲得し、帰属するシステムを選び取る時期、④地域コミュニティで関係性を定着、拡大させる時期をたどった。

### 対 P02 「ケアの倫理」における関係的自己の生成過程について

——知的障害のある子どもの母親へのインタビュー調査から  
鈴木ちひろ（大阪府立豊中支援学校）

「関係的自己」(relational self) はケアの倫理において言及されている語で、「関係の中で相手とともに塑像される自己(品川 2007:203)」である。ケアを中心とした他者とのつながりをもたらす一方で、ケア者と被ケア者の二者関係に閉じこもってしまった場合には、過度な自己犠牲や、パターンリズムに陥る恐れもある。E・F キティは、A・センの「潜在能力アプローチ」に依拠し、「潜在能力」の平等を「依存関係の質そのもの」に注目し、その「潜在能力や機能の領域を平等化するような配分(Kittay1999:390)」を考える、「ドゥーリア」の概念を提唱している。本研究は、知的障害のある子どもの母親へのインタビュー調査から、どのような「関係的自己」の在り方が、豊かなケアのネットワークへのつながりに結びつくのか、また、どのようなきっかけや経験によって生成されるのかを明らかにし、必要な制度や支援について考察することを目的とする。

### **対 P03 医療的ケア児に関わる 5 年以上勤務を継続した学校看護師の初期段階の定着要因 ——複線径路等至性アプローチによる 2 事例からの検討——**

林田一子(兵庫県立大学看護学部・立命館大学人間科学研究科博士課程後期課程)

本研究の目的は、TEA を用いて医療的ケア児に関わる学校看護師が勤務を継続するプロセスを明らかにし、初期段階の定着要因について検討することである。特別支援学校に 5 年以上勤務した学校看護師 2 名 (A 氏・B 氏) にライフライン法を用いてインタビューし、[学校看護師を続ける] を EFP とした個別の TEM 図を作成した。A 氏の 2nd-EFP は[医療的ケア児の母を支える]、B 氏の 2nd-EFP は[子どもが安心して通え、教育を受けられる安全な環境を作る]であった。学校看護師としての役割がわからず、学校の組織文化がわからない中で初期段階の TEM 図は右肩下がりであった。初期段階で右肩に上がることに影響した社会的・個人的諸力としては、A 氏、B 氏ともに教諭や児の母から自身を必要である・求めていると感じる経験であった。SD や SG によって PG が立ち上がるかどうか、初期段階の定着要因となっていると考えられた。

### **対 P04 吃音のある看護師の職業的アイデンティティ発達プロセス**

#### **——キャリア成熟期を迎えた看護師の語りをもとにした事例研究**

矢野亜紀子・荒木彰裕・姫野雄太・福田広美 (大分県立看護科学大学看護学部)

目的：本研究は、吃音のある看護師の職業的アイデンティティ発達プロセスを明らかにすることを目的とした。

方法：発達性吃音症のある看護師経験 14 年の看護師を対象に半構造化面接を行い、複線径路等至性アプローチを用いて分析した。

結果：吃音のある看護師の職業的アイデンティティ発達プロセスは、5 つの時期区分と 10 の分岐点で構成された。分岐点には、職場の上司同僚の態度や協力者自身の吃音に対するセルフステイグマが、ある時は促進的、ある時は抑圧的な力として働いていた。分岐点では、患者救命に成功した経験が転機となっていた。ケアを通して様々な患者の人生に触れる経験は、自身の障害に対する認識に新たな視点を与え、吃音のある看護師ならではの看護観へとつながっていた。

考察：一連の分析により、患者、上司同僚、家族、当事者仲間、医師との相互作用を積み重ね、看護師である自己の障害のある自己が統合されるプロセスが明らかになった。



## 対 P05 有機農業生産者の熟達プロセス

### ——複線経路等至性モデリング (TEM) を主とした解析

中川祥治(放送大学大学院文化科学研究科, 農業・環境・健康研究所)

有機農業生産者の熟達プロセスを解析し、有機農業の普及に資する知見を得ることを試みた。まず、国内の有機農業団体の熟達生産者から3名を選抜し、現在に至る過程を聞き取る面接調査を実施しつつ、TEM 図を描いた。その結果、『家業を継いで就農する』、『自然観や人間観などスピリチュアルな面が変容するような自己学習や講習の受講を経て、思想性のある有機農業を実践する』、『消費者から疾病改善の声が届き、自分なりの有機農業の達成感を得る』および『子どもが後継者となり、次世代へ有機農業を継承する』という共通経験が見出された。次いで、それらの核となる4つの必須通過点を、どれだけの有機農業生産者が経験しているかを質問紙調査で調べた。その結果、自身の子どもが有機農業を継ぐ意思を示している生産者は25.4%しかいないことがわかった。考察の結果、生産者が後継者を得るためには、マズローの基本的欲求に注目する必要性が示唆された。

## 対 P06 セルフケアとしてのアートベースのオートエスノグラフィー

中井好男(大阪大学大学院人間科学研究科)

発表者は障害者家族としての経験を取り上げたオートエスノグラフィーに取り組んできたが、障害者差別を理由とするトラウマティックな経験については十分に語りうるものとなったものの、親族の喪失やペットロスとそれに伴うグリーフについては、語られないものとして経験の中に閉じ込められたままであった。現在の私に至る TEM 図の作成時にも出来事として記載されることさえなかったこれらの喪失体験は、感情を主観的に訴える喚起的オートエスノグラフィーを写真を用いて作成する過程で語りえぬものとして蘇るとともに、そのオートエスノグラフィーを他者と共有することによってそこに伴う感情をグリーフとして認知し、受容していくためのレジリエンスが高まる過程を経験した。本発表ではこれをアートによるセルフケアであるアートセラピーと捉え、写真を用いたオートエスノグラフィーが自己に何をもたらすのかについて意見を交換する場を持ちたいと考えている。

## 対 P07 TEM 図による英国在住日本人女性の心理的文化変容とキャリア選択プロセスの分析 (5)——調査協力者 B に対する約 15 年に渡る縦断的インタビュー調査を基に

石盛真徳(追手門学院大学経営学部)

本研究では、ベトナム出身の中国系英国人と国際結婚した日本人女性である調査協力者 B の約 30 年に渡る英国でのライフストーリーについて、約 5 年ごとに計 4 回行ったインタビュー調査で聞きとった内容を TEM で分析した結果について報告する。結婚後 B は長女の出産と育児に加えて、夫の家族がファミリービジネスとして経営する中華レストランを手伝うという「大変なことがありすぎた」日々を過ごしていた。B はその当時から「外で働きたい」というキャリア志向を有していたが、実際にファミリービジネス以外の職に就いたのは、子育ても終了し渡英後 20 数年が経過してからであった。その背景にはビジネスの資金繰りが上手くいっていなかったため経済的に自立したいという動機も存在していた。「住む家がなくなるっていう感覚を背負いながら、ずっと生活」していたため、現在の落ち着いた状況を「この現実には本当かなっていう」感覚も持つほどであった。

## 対 P08 TEA (複線径路等至性アプローチ) における時間概念の考察

——ベルクソン、ヴァルシナー、ズウィットンを中心に

上川多恵子(立命館大学 OIC 総合研究機構)・

宮下太陽(日本総合研究所 未来社会価値研究所)・サトウタツヤ(立命館大学総合心理学部)

TEA の中心的分析方法として確立している TEM では“非可逆的時間”という時間概念が示されており、時間ともある事象をどのように図で示しながら分析するのかという点と向き合うこととなる。しかし、実際には研究協力者の語りから聞かれた現在の個人の意味づけを非可逆的時間の流れの中でどのように図に示せばよいのかと悩む研究者の声は多い。やまだ (2010) は、TEM の評価に関わって「選択の岐路は本当にそのときの今、現在にあるのだろうか。それが『岐路』であったかどうかは、実は選択したあとに振り返って見た人生軌跡としてしか記述できないのではないだろうか (p.51)」と疑問を呈している。しかし、非可逆的時間は TEM の数少ない前提の一つであり制約を課すことで創造性を高めるという意図もある。そこで本発表では、これまで蓄積されてきた TEA に関わる研究成果から時間概念についての理論的背景を整理し、TEM 図で事象を描く際の留意点と課題を論じる。

## 対 P09 自己の世界における TEM との対話的関係の考察——対話的自己論に基づいて

小山多三代（立命館大学大学院人間科学研究科）・土元哲平（中京大学心理学部）  
・安田裕子（立命館大学総合心理学部）

複線径路等至性モデリング（以下、TEM）は、人間の発達プロセスを捉えるうえで有用であり、これまで、研究参加者の人生径路を描く研究方法として用いられることが一般的であった。一方で、第一発表者は、TEM の有用性を「研究のツール」としての側面にとどまらず、より普遍的な「哲学」として見出し、TEM の考えを自身に内化させて自己内対話を促しながら、日常的な思考を深化させてきた。このように、研究という文脈に限らず、TEM の考えを様々な場面で応用する様を本発表では“Temmy”と呼ぶ。本発表では、Hermans & Kempen による「対話的自己論（Dialogical Self Theory）」に基づき、自己の世界にポジショニングされた TEM と、様々な「私」、他者、ものとの対話的関係について考察を行う。これにより、TEM が人間の発達を捉えるツールとしてのみならず、人間の思考を深める哲学として機能しうることを示し、Temmy が人間の発達を促す可能性について検討する。

## 対 P10 日本在住朝鮮語話者の家庭言語政策の変容：ある外国籍保護者の「子どもに対する期待」を中心に

市川章子(国立国語研究所)

本研究の目的は、複言語環境で育った外国籍保護者が、日本生まれの外国籍児童生徒に対して、家庭内でどのような言語政策を重視しているのか、また、その子どもに対する期待がどのように変容したのかを明らかにすることである。調査方法は、電話と対面でのインタビューを採用した。複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach:TEA）で分析した。結果から、統合された個人的志向性（SPO）「3か国語を話せるようになってほしい」、分岐点（BFP）「子どもの身体の回復」となり、家庭内の言語政策が変化していることが示唆された。社会的方向づけ（SD）「家庭環境の変化（3か国語から日本語中心へ）」、「通院」、「大学受験に向けて情報がないことへの不安が続く」、等至点（EFP）「日本の大学合格に向けてサポートを続ける」、両極化した等至点（P-EFP）「進学そのものを諦める」が得られた。

## 対 P11 コーディネーター職にある日本語教師とコーディネーター職にない日本語教師のキャリア形成の比較

佐藤綾(福井大学グローバル人材育成研究センター)・片野洋平(長岡技術科学大学グローバル教育センター)・高木裕子(実践女子大学人間社会学部)

本研究は日本語教師のキャリア形成がどのようなものを明らかにすべく、TEA を用いてキャリア形成の径路およびそこに影響する要因を主に見ている。本発表では、15 年以上の教師歴を持つ、1) コーディネーター職にある日本語教師 5 名と 2) コーディネーター職にない日本語教師 4 名のキャリア形成を比較した結果について報告する。1) については共通の径路が見られるとともに、時期区分で分けられた各時期におけるキャリアの継続・選択に影響を与える要因に共通するものがあり、また、それが時期によって同じように変化している様子も窺え、そのキャリア形成は類似していた。一方で、2) については共通の径路は見られるものの、時期区分も、また、各時期が持つ意味も異なっていた。さらに、1) に見られたように、類似の時期に共通の要因が現れることがほぼなく、各調査対象者でキャリア形成のあり方が異なっていたことから、2) についてはその多様性が窺えた。

## 対 P12 生成 AI による質的研究法の提案

香曾我部琢(宮城教育大学)・駒久美子(千葉大学)・中田範子(東京家政学院大学)  
・保木井啓史(福島大学)・田宮希砂(仙台青葉学院短期大学)  
・郷家史芸(千葉明德短期大学)・佐藤孟(六郷保育園)・藤田清澄(盛岡大学)  
・平山淑希(仙台青葉学院短期大学)・石田淳也(常葉大学)

本研究では、生成 AI を用いた質的研究法を提案することを目的とする。現代において、生成 AI の発展は目覚しく、データサイエンス分野ではビッグデータを統計的に分析する手法について、その可能性や限界について日々新しい取り組みがなされている(株式会社 SIGNATE, 齊藤秀, 2024, データ分析アプリ“DXCopilot”など)。質的研究法においても、平綿ら(2023)が M-GTA と SCAT の質的研究法を取り上げて、実際に ChatGPT を活用した SCAT によるインタビューデータの分析を行っている。また、NAGAI(2023)は“質的研究：SCAT 分析専用 API”をネット上に公開し、ChatGPT を用いた SCAT による分析ツールを提案している。しかし、一方で生成 AI を用いる際には個人情報漏洩や回答の正確性(根拠)などのリスクが存在することが示されている。

そこで、本研究では Fixer 社が開発した Gaixer を用いて、情報漏洩や回答の正確性などのリスクに対応した質的研究法を提案するものである。

### 対 P13 TEA による重度および多数う蝕のある幼児の養育者の受診養育行動プロセス

元山彩織(立命館大学大学院人間科学研究科)・旭爪伸二(わかば小児歯科)  
・野口浩子(福岡市子ども総合相談センター)・サトウタツヤ(立命館大学総合心理学部)

【目的】重度・多数う蝕のある子どもが存在し、二極化が問題となっている。しかし、受診できていないままの子どもと受診できた子どもがいる。なぜ受診に至ったのか。本研究では、デンタルネグレクト防止対策の検討の一助とするため、子どもの養育者の受診養育行動プロセスを明らかにする。

【方法】重度および多数う蝕歯（未処置歯）のある幼児の母親に対し、歯科受診までの養育受診行動プロセスについてインタビューを行い、TEA（複線径路等至性アプローチ）にて分析した。所属大学での研究倫理審査承認後に実施した。

【結果】保育士からの指摘が遠回しの言い方で意図が分からず、受診に至らなかった。しかし、ふと子どもの口内が見えた際、以前の歯科医からの指導内容を思い出し、すぐに受診させた。

【考察】保育士の養育者とのコミュニケーションの質向上の必要性、正しく詳しい知識を伝えること、口腔に関心が向く指導が必要であることなどが示唆された。

### 対 P14 TEA における記号圏と環世界概念の検討

宮下太陽（株式会社日本総合研究所未来社会価値研究所）

記号圏とはロシアの文学・文化研究者であるユーリー・ロトマンにより提唱された概念であり、記号が記号として働く前提条件として、人と記号との相互作用が機能するための必要不可欠な領域と捉えることができる。環世界とはヤーコプ・ファン・ユクスキュルが提唱した生物学の概念であり、すべての動物はそれぞれに種特有の知覚世界をもって生きており、その主体として行動しているという見方である。ヴァルシナー(2014)は、環世界と記号圏を文化的構築の主要なメカニズムである内化・外化プロセスの背景として設定している。なお記号圏と環世界の関係について、カレヴィ・クルは相互に接続された環世界の集合が記号圏であるとし、2つの環世界がコミュニケーションしているときは同じ記号圏の一部になっていると指摘している。本発表では、TEA における記号圏と環世界概念を改めて検討することで TEA の理論的拡張を図る。

## 対 P15 触法障がい者における刑務所出所後の社会適応過程

紀司かおり (岩手県立大学 社会福祉学部)

5 年以内に再犯を犯し刑務所へ戻る割合は出所者全体で 34/8%であり、仮釈放者に比べて満期出所者の再入率は 44.8%と依然として高い(法務省,2023)。さらに、知的障害のある受刑者の多くは、短期間のうちに軽微な犯罪を繰り返して複数回刑務所へ出たり入ったりすることが明らかになっている(のぞみの園,2017)。本研究では、特別調整 (高齢又は障害を有し、帰住先のない受刑者や少年院在院者に対して、釈放後速やかに福祉関係機関による適切な介護・医療・年金等の福祉サービスを受けることができるようにするための手続き) によって刑務所を出所した当事者の語りをもとに、これまでの生活、そして出所後どのような困難に直面し、どのように乗り越えたのか、将来の展望、といった社会生活に適応していくプロセスを質的に検討することを目的とする。

## 対 P16 日本の大学院に進学する海外の中国人日本語教師のキャリア形成

——複線径路・等至性アプローチからの一考察

華徐珍 (立命館大学大学院人間科学研究科)

グローバル化の進展や社会環境の変化によって、将来を見通しがたい、国際的競争が激しい立場に置かれる中国人日本語教師は中国の教育現場で教育不安・職業不安を抱え、様々な課題に直面している。本研究は、教師支援のため、中国人日本語教師を対象として、Super (1980) のキャリア発達理論に基づき、「ライフ・キャリア」という視点で彼らのキャリア形成を捉えた質的研究である。TEA を用い、教師 3 名に半構造化インタビューを行い、それぞれの TEM 図を描いた。分析の結果、教師は教育現場で困難を経験し、社会的・文化的な諸力に構築された原因で日本の大学院に進学し、成長を伴ってキャリアを形成したことを明らかにした。教師の人生に最も影響を与えた社会的力は、「中国の教育体制」「現地政策」「日中関係」の 3 つが挙げられる。影響を与えた文化的力は、教師が担っている多様な役割と強い関連がある。果たしている役割の有無・良否によって、生成された SD・SG が教師の人生に影響を与えた。

## 対 P17 海外語学文化研修参加者がネットワークの再構築により研修継続を希望するまで

### ——異文化環境における「孤独」の意義

岡葉子(帝京大学国際日本学科)

海外語学文化研修（以下、研修）の効果は、語学の習得や異文化理解促進に留まらず、自己形成や社会人基礎力の向上など広範囲にわたることが報告されている（小林 2013, 足立 2015）。大学 2 年次に実施する 4 か月の研修（オーストラリア派遣）に参加した学生に面接調査を実施したところ、一部の学生に物理的・心理的な「孤独」に関する語りが聞かれた。「孤独」を経験した学生 4 名に追加の面接調査を実施した。3 回の面接データを元に、「孤独」を経験した時点を必須通過点、研修の継続を希望する時点を等至点と定め、ネットワークの再構築過程を TEM によって図化した。その結果、「孤独」を経験して「帰国したい」願望を持ったものの、「ポジティブに考える」といった気持ちの切り替えや、「他者に相談する」等の問題解決行動を経てネットワークが再構築され、最終的に「もっとオーストラリアにいたい」と研修継続を希望する過程が明らかになった。

## 対 P18 脳卒中後遺症者の地域における療養生活の変容とその複雑性

### ——TEM からみえる「転換」

横山直子(立命館大学大学院人間科学研究科)・安田裕子(立命館大学総合心理学部)

脳卒中は日本人の死因第 4 位の疾患であり、発症により深刻な ADL 制限や QOL 低下を招く。身体的な影響が少なく自立度の高い状態で退院したとしても、生活の変化と心理面が相互に関連し生活の縮小をもたらすともいわれる。これらから脳卒中後遺症者が地域でいかに充実した療養生活を送るかは課題である。本研究では、脳卒中後遺症者の生活変容過程の複雑な事象を捉えることを目的とした。対象者 1 名に地域療養生活についてインタビューを行い、複線径路等至性モデリング（TEM）および、ブルーナーの可能世界の心理に依拠した仮定法で分析した。結果、対象者は障がいを負い今まで可能だった事柄が困難になるといった生活の喪失により、元々存在していた家族との軋轢や過去の困難な出来事等が心情的に表面化し、心が揺さぶられる出来事が幾つか存在したことを語っていた。その度に揺さぶりを「転換」し、再び刷新された生活へと適応しようとしていることがわかった。

## 対 P19 フィリピン人日本語教師の TLMG からみる非母語話者教師が捉える優れた日本語教師像

稲田栄一(関西学院大学国際学部)

近年、日本語教師のキャリアに関する研究は増加傾向にあるが、母語話者教師（Native teachers : NT）を対象としたものが多く、非母語話者教師（Non-Native teachers : NNT）に関する研究は少ない。日本語教育分野における NNT への理解は途上の段階であると考えられるが、海外に目を向けると多くの NNT に支えられている日本語教育現場の現状がある。そこで、本研究では NNT を理解するための試みとして、フィリピン国内で日本語を教える NNT の A さんを対象に「TEM による教職経験の可視化」と「TLMG によるキャリア観形成の分析」を行い、得られた結果から NNT が捉える優れた日本語教師像がどのようなものかを探った。分析の結果、A さんの日本語学習経験や教育現場での困難・得られた学びなどがキャリア観形成に大きな影響を与え、その中には「日本語が正しく運用できる教師」や「日本人教師とも対等に仕事ができる教師」といった NNT だからこそ考え得る優れた日本語教師像が形成されていたことがわかった。

## 対 P20 「保育者アイデンティティ」の形成に関する研究-TEM を用いた省察を手がかりに-

畠中真咲（無所属）

本研究では、保育者自身の経験や価値観などに対する省察が、自身の保育者としてのアイデンティティを認識するきっかけとなるのか、また、そうした省察が保育者にどのような変化をもたらすのかについて、インタビュー調査を実施し、複線径路・等至性モデリング（Trajectory Equifinality Model: 以下 TEM）を用いて分析をした。本研究により、保育者の経験や価値観を元に TEM 図を作成することで、自身が選択しなかった径路や分岐点が明確になり、様々な分岐点を経て選択を重ねた結果が今ここであるということに意識をもつことにつながった。



**抄録集：対面研究交流委員会企画ワークショップ**（5月26日15：15-17：15）

（会場：502）

## **hana-TEM アートで描くわたしの径路**

企画：研究交流委員会（中坪史典・加藤望・上川多恵子・土元哲平・中本明世）

このワークショップは、アートによって人生径路を描くワークを実際に体験しながら参加者同士が交流できる場です。具体的には、花や石などの素材を用いて TEM を作り（hana-TEM と呼びます）、それをもとに他者と交流することになります。人と話すのが苦手、自分自身のことについて言語化するのは苦手、という方でも大丈夫です。ことばにする必要はありません！「さまざまな作品を眺め、感じ、浸る」ことによる共感、ないし他者の感覚と関わることを大切にします。hana-TEM は、TEM の基本的なスキームを活かしながらも、言語にこだわらずに、人生径路における「曖昧さ」や「複雑さ」をより豊かに表現することを目指します。hana-TEM を作成したり、他者と交流することは、自分自身の癒やしになります。また、芸術を通して自己・他者との対話や内省を深める効果も見込まれます。皆様のご参加をお待ちしております。

関連文献：土元哲平・上川多恵子・中本明世・加藤望・中坪史典,(2024)「hana-TEM：アートで描くわたしの径路」：TEA と質的探究学会第 2 回大会・研究交流委員会企画ワークショップ、質的研究と社会実装,立命館大学ものづくり質的研究センター紀要, 創刊号, pp. 1～12  
※ワークショップ参加者は事前に下記から参加登録をお願いします。

<https://forms.gle/kihGahUWH8uCdLdq5>

※このワークショップに関する問い合わせは、大会事務局ではなく、下記の研究交流委員会までお願い致します。

問い合わせ先：研究交流委員会 中本明世 nakamoto@konan-wu.ac.jp

**抄録集：対面大会実行委員会ワークショップ°**（5月26日15：15-17：15）

（会場：15時10分に5階エレベーターホール集合）

## **TEM × アートベースドリサーチ**

講師：ヤン・シンイ（武蔵野美術大学）×荒川歩（武蔵野美術大学）

アートベースドリサーチとは、アートを媒介として探究を行う研究活動である。武蔵野美術大学クリエイティブイノベーション学科では、積極的に、この方法を用いている。

そこで、本ワークショップでは、写真を使ったアートベースドリサーチとTEMの融合を試み、市ヶ谷という過去と現在が入り混じった土地を舞台に、参加者とともに、街の記憶をチェキを片手に写し取り、街が果たした複数の機能や光景の径路を描き出すことにチャレンジする。これにより、TEMの新しい可能性や気づきを得ることを目指す。

参加者は大会参加申し込みののち、下記から事前申し込みください

<https://forms.gle/LL7zNPrt3CLF7F3G9>

関連文献：

パトリア・リーヴィ（編）岸磨貴子・川島裕子・荒川歩・三代純平（編訳）（近刊）アートベースドリサーチ・ハンドブック 福村出版

## 抄録集：対面講習会 1 (5月26日 15:15-17:15)

(会場：504)

### TEAとインタビュー

講師：徳田治子（高千穂大学）

インタビューは、質的研究における主要なデータ収集法として位置づけられます（クヴァール, 2016/2007）。この講習会では、まず、質的研究におけるインタビュー法の基礎として、研究方法の選択、質問項目の設定、さまざまな質問技法、データ分析の基本的な考え方と実施方法について学んでいきます。また、近年、質的研究を実施する上で、「方法論的整合性」の重要性が指摘されています（レヴィット, 2023/2021）。そこで、後半では、特に「方法論的整合性」の観点から、質的研究における TEM/TEA の特徴や位置づけを整理しつつ、インタビュー法を用いて TEM/TEA 研究を行う際の留意点について、参加者の皆さんとも議論を交えながら、学んでいきたいと思えます。質的研究の初学者、これからインタビュー法を用いた研究をしたいと思っている方、実際にインタビュー法を用いた TEA 研究を検討している方などの参加を想定しています。

#### 引用文献

- クヴァール, S. (2016). 質的研究のための「インター・ビュー」(SAGE 質的研究キット2) (能智正博・徳田治子, 訳). (Kvale, S. (2007) Doing interviews (Sage Qualitative Research Kit 2). SAGE.)
- レヴィット, H. M. (2023). 心理学における質的研究の論文作法—APA スタイルの基準を満たすには (能智正博・柴山真琴・鈴木聡志・保坂裕子・大橋靖史・抱井尚子, 訳). (Levitt, H. M. (2021) Reporting qualitative research in psychology: How to Meet APA Style Journal Article Reporting Standards. The American Psychological Association.)

**抄録集：対面講習会 2**（5月26日 15：15-17：15）

（会場：503）

## **よりよい質的研究論文を書くために**

### **——APA の質的研究論文執筆基準の功罪**

講師：能智正博（東京大学）

質的研究の評価基準は量的研究と比べて明示化しにくい部分があるが、そんななか、2020年に改訂されたアメリカ心理学会（APA）の論文執筆マニュアルには、量的研究と並んで質的研究の論文執筆基準も掲載された。これは質的研究を評価するための土台となる共通の枠組みを提供したのもであり、ある意味で画期的とも言える。これを目安として初学者が質的研究論文の質をより高めていくことも可能であろう。ただそこには限界もあり、この基準をどのように使っていくかについてはまだ議論が必要と思われる。この講習会では、H.レヴィットの解説書（邦訳 2023）なども参照しつつ、APA 基準の具体的内容を紹介し、具体的な論文執筆における適用可能性を探り、同時にその限界についても考えてみたい。

## TEA と質的探究学会 第3回大会実行委員会

### 大会実行委員長

荒川歩（武蔵野美術大学 造形構想学部）

### 大会実行委員（順不同）

山口洋典（立命館大学共通教育推進機構）

市川章子（国立国語研究所）

蔡豊盛（武蔵野美術大学 ソーシャルクリエイティブ研究所）

楊榛（武蔵野美術大学大学院造形構想研究科）

朱文帆（武蔵野美術大学大学院造形構想研究科）

サトウタツヤ（立命館大学・総合心理学部）

安田裕子（立命館大学・総合心理学部）

### 共催

武蔵野美術大学ソーシャルクリエイティブ研究所